

情報公開と市民参加

「民可使由之、不可使知之」論語

(民は之に由らしむ可し、之を知らしむ可からず)

孔子のこの言葉は、為政者（いせいしゃ）が国（民衆）を治める時の心構えを説いたもので、「為政者は国民から信頼されて導いていかなければならないが、国民に正しい教えを完全に理解させるのはとても難しい」という意味です。

しかし多くの人々は「可し」（べし）を命令の助動詞と誤解し、「為政者は国民に批判されることなく頼ってもらえばいいのであって、本当のことは知らせてはいけない」と誤った解釈をしています。つまり「強きには文句を言わず、黙って従え」という意味に理解しています。

孔子がこの言葉を説いた時代は、民衆にあまり知識がなく文字を読めない人も相当いたはずで、まして全国に限らず情報を伝える手段もありませんでした。だからこそ、為政者は自分の人徳を磨き、民衆の信用・信頼を得て、民衆を正しい方向に導かなければならなかったのです。

現在では、情報通信技術の著しい発達により、世界中で起きたさまざまな出来事が瞬時に伝達されるようになりました。為政者にとって都合の良い情報だけでなく、不都合な情報でも容易に世の中に流れてしまう時代です。今、為政者に求められていることは、人徳を磨くだけではなく、政府の持っている情報や政策を積極的に民衆に開示し、民衆の理解・協力を得ることが大切です。

市政情報を積極的に市民に公開することは行政の責務（アカウンタビリティ）、つまり市民に対する説明責任です。決定した後の情報だけでなく、決定途中の情報についても市民に公開すれば、市民はそれに対して意見を述べることができます。また、市政に関する情報を常にオープンな状態にすることで、市民との信頼関係を構築できるものと信じています。また、このことにより市政に対する市民の関心も高まり、ひいては市民の市政への参加を促すことにもつながるものと考えています。（平成20年8月号）